

雪は大気の記憶装置

春の立山の象徴は高原バスの両側いっぱい広がる雪の壁でしょう。立山黒部アルペンルート「雪の大谷」では、多いときにはその高さが20mにも達します。これは何と7階建てのビルほどの高さです。

雪の壁の中には実に多くの情報が記憶されています。例えば、厚いしまり雪の層は冬型の気圧配置で寒い吹雪の日が続くとでき、ざらめ雪の層は高気圧に覆われ暖かい日があると雪の表面がとけてできます。融雪期には、とけ水が雪中で再び凍り、厚い氷の層ができることもあります。

また、大気中に浮かぶ小さな粒子も取り込まれています。遠く中国大陸の黄土地帯から飛ばされてきた黄砂が、積雪の中にくっつきりと数層の汚れ層を作ることがあります。さらに、気象条件を反映して海の塩の成分や大陸の土壌の成分などが特徴的に分布しています。これらから雪の壁に時間を刻むことができるようになりました。さらに、人為起源の酸性物質がはるばる飛来し酸性雪の層ができることもあります。立山の雪はまさに大気の記憶装置といえます。

